# それぞれの昭和二〇年八月一五日

『石桜五〇年史』巻末の年表には、昭和二〇年の欄に次のような記述が並んでいる。

二・二四　一七回生勤労動員にて株式会社日本製鋼所横浜製作所（皇国一八二〇工場）へ出発（機関砲製造）

三・二七　卒業式（一五回生七一名、一六回生九八名、川崎市内の三菱重工業株式会社工場にて行なう）

四・一二　一七回生（六人）連隊区司令部勤労動員（六月一二日まで）

一五　空襲で一六回生の宿舎（川崎）焼失、教科書卒業証書などを焼く（文科系進学者は七月に進学校入学のため残留）

六・二一　久慈鉱山・東北振興繊維株式会社勤労動員（一八回生、八月二〇日まで）

二六　小岩井農場勤労動員（除草作業七月二日まで）

昭和一九年から二〇年の敗戦までの間、右のほか左記事業所等にも動員された。

盛岡専売局、盛岡電気通信工事局、岩手県警察、紫波郡不動村農業会和賀郡湯田村（開墾作業二年生）

昭和二〇年三月に五年生（一五回生）と四年生（一六回生）が同時に卒業。四年生は一年繰り上げの卒業だった。したがって四月から始まる昭和二〇年度には五年生がおらず、四年生（一七回生）は横浜に動員、三年生（一八回生）が在校最上級生だった。

その三年生も六月には久慈鉱山、東北振興繊維、盛岡専売局など、それぞれの動員先に散っていった。二年生は湯田村の開墾作業にやらされた。

生徒という主役のいない岩手中学の校舎には〝工場疎開〟と称して機械が運び込まれ、市内の主婦たちがミシンで軍用靴下や下着などの縫製に従事した。もはや学校というよりも町工場のような風景だった。

三年生のあいだでは、東北振興繊維に動員された者は女学生と一緒であることをうらやましがられ、専売局に動員された者は煙草が手に入るとうらやましがられた。もちろん、どちらも機械の移動やら原料運び、防空壕掘りに明け暮れする毎日で、うらやましがられるような状況ではなかった。

久慈鉱山の砂鉄掘りに動員された生徒は、こんな光景を見ている。

生徒のなかに近くの農家へ行って労働提供し、報酬として芋などをもらって来た何人かがいた。ところが、そのことを嗅ぎつけた憲兵が全員を集め、「皇民として恥ずかしいと思わないのか」と説教した。それを聞いて、生徒を引率して来た阿部二教師が真っ赤になって怒った。軍に生徒を叱る資格があるのか、その軍はいったい何をやっているのか――と生徒をかばっての怒りだった。普段はとても温厚な阿部教師が怒りに身を震わせるのを見て、生徒は先生の人間性に触れた思いがした。

湯田の開墾作業は寝具持参で、相当長期間におよんだ。食糧も乏しく、待遇のあまりのひどさに激怒して、命懸けなのは軍人ばかりじゃない、俺たちだって命懸けだ、と憲兵とやりあった教師もいた。

学校には佐々木校長以下数人の年長の職員と一年生だけが残った。一年生は何班かに分かれて会議室に寝泊まりし、空襲に備えた。盛岡の駅前が空襲されたのは三月一〇日だった。鉄道を狙った敵艦載機がちょうど母校の上空で発砲したのか、翌日の校庭には弾丸の薬莢がそこかしこに落ちていた。

八月一五日の朝、英語教師・山中順三は学校の下駄箱のところで同僚と話した。

「いよいよ最後の死闘か、敵上陸兵迎撃か……」

まさかきょう戦争が終わるなどとは思ってもいなかった。

廊下側の窓を全部外した職員室で、古いラジオをみんなで囲んで玉音放送を聞いた。放送が終わっても二〇人ほどの生徒がトランプなどして遊んでいる。

山中教師が「戦争に負けたんだよ」と告げると、はじめてワッと泣いた。幼い一年生には放送の意味がわからなかったらしい。

その日、黒石野の開墾に行っていた二年生は三田農場で放送を聞いた。負けたということはわかった。

久慈鉱山で放送を聞いた三年生は、これからどうなるのか、と思った。

「妹や姉さんはどうなるのか――」

南昌山の麓へ機械を疎開させに行っていた三年生は、負けたとわかってすぐ工場に戻った。女工員たちが白鉢巻き姿のまま広間に集まってオイオイ泣いていた。自分たちもその号泣の渦に加わった。

母校の二回生であり体育教師でもある戸嶋正夫は、応召先の熊本で終戦を迎えた。軍人として涙を流したが、ひとりの人間としてほっとした気持ちでもあった。山、川、小さいときのことなどが、しきりに思われたりした。

## 価値観の一変と混乱

戦争が終わり、勤労動員で各地に四散していた職員と生徒が、ふたたび学園に復帰してきた。また召集されても内地で軍務についていた職員は、比較的早い時期に復職することができた。こうして以前のように、岩中の校舎に生徒と職員が通いだし、昭和二〇年度の二学期から授業が再開された。

戦後の学園では、それまで信じてきた価値を壊すことから始めなければならなかった。

軍国主義的な内容の図書はすべて焚書された。歴史の教科書は、ほとんど判読不可能になるまで墨で塗りつぶされた。軍事教練用具や銃剣道の防具なども処分した。背嚢一〇〇個も焼却した。原形をとどめてはいけないというので、木銃は子供のソリに造りかえた。銃剣は灰皿に変身した。その他処分しきれないものは、寄宿舎の床下に隠したりした。いちばん骨を折ったのは、堅牢に出来ていた奉安殿の取り壊しだった。

心のきりかえは物の破壊以上に容易ではなかった。軍国主義から平和主義、全体主義から民主主義という、極端から極端への価値観の変化は、教師にも生徒にも混乱をもたらした。

多くの教師が教育方針の一八〇度転換に悩んだ。イデオロギーといちおう無縁な数学や理科などはまだよかったが、軍事教練などを担当してついこの間まで徹底した軍国主義教育を行なっていた教師は、教育方針の転換にともなう苦悩を人一倍強く味わわなければならなかった。教科書を使わず新しい独自の解釈による授業をした歴史の教師もいたし、悩んだ末に辞めていった教師もいた。

生徒のうち、もっとも極端な変化を体験したのは、おそらく予科練から母校に戻ってきた生徒たちだったろう。同級生の目から見れば、短刀を胸に隠し持ち、落下傘の切れ端で作った白い絹のマフラーを首になびかせ、酒や煙草の習慣を身につけて粋がる者も多かった予科練帰りは、はじめのうちは別世界からやってきた異人種のように感じられた。しかし当人たちは、国家のために文字通り一命を投げ出す特攻教育を受けていたのであり、終戦によって自己の存在価値が無に帰するという、まことに虚脱的な立場に立たされていた。彼らもまた、いわば軍国主義の犠牲者だった。この精神的な動揺を克服する術を知らず、粗暴な行動に走って学園の秩序を乱す者も一部にはあったのである。

## 向学心と白紙答案事件

もちろん、終戦直後の生徒たちは目標を失っ

た心の彷徨をいつまでも続けていたのではない。上級学校への進学に、またスポーツや文化活動にと、若いエネルギーのはけ口をそれぞれに見いだしていった。

戦後の物不足のなか、授業で使われるのはザラ紙で二〇ページほどの薄っぺらな教科書、定期考査の用紙は先輩たちの古答案のウラ紙だった。

新刊本が極めて少なく、古本屋で本を探すのが大きな楽しみだった。先輩を訪ねては、読みおえた本を譲ってもらった。古本屋あさりで見つけた四、五年前の受験雑誌『螢雪時代』で受験勉強の要領を知るといった具合だった。有名な著者の参考書が入荷するという情報で、本屋のまえに行列が出来たこともある。入手できなかった者が、その参考書を借りて全部写したという伝説のような話も残っている。

極端な物資不足は、生徒に経済的なやりくりを自然と上達させた。古本屋で金をこしらえたり、闇市をのぞいたり、友人と物々交換するなどしたものである。そして遠距離をものともせず友達の家へ遊びにでかけ、進んで談論風発を楽しむ気風が強かった。

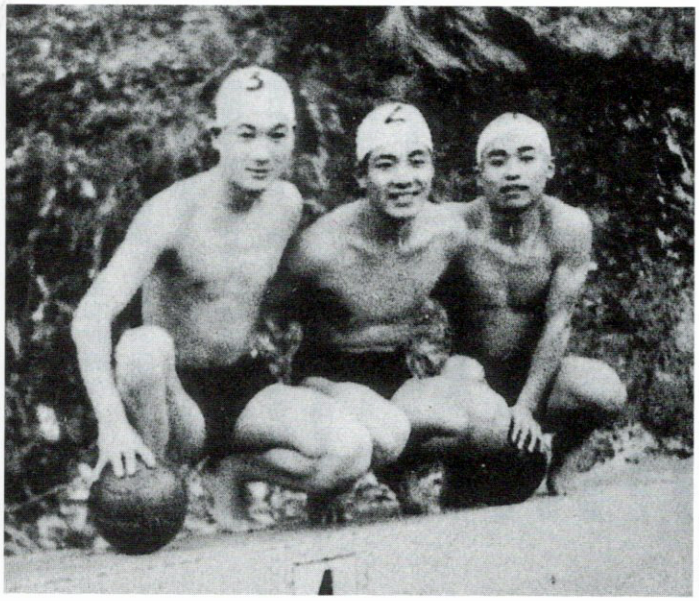
ところが、向学心に燃え、授業を受ける態度に日々真剣さを増す生徒たちに対し、教師たちが充分に応じきれない面がなくもなかった。戦後の一時期、職員数が少なかったり異動が多かったりしたことも一因ではあるが、教員室がかかえていた問題は単に手不足だけにはとどまらなかった。何度も述べるように終戦を境に社会の価値観が一変したが、社会人としての職員がそれに対処した仕方はさまざまであり、全体がひとつにまとまるのは困難であった。結局、いろいろなタイプの教師が一度に出現したのである。

大部分の教師たちは、自分自身の精神的・物質的苦境を乗り越えて熱のこもった授業を展開した。しかしなかには、教室で同僚を誹謗するという人もいた。また教科書を棒読みにするだけの授業で済ませたり、農村出身の生徒に食糧入手を求める例なども出てきた。こうしたことから、一部の教職員への生徒の不信の声が高まった。昭和二二年の秋ごろのことである。

たびたび生徒大会が開かれ、何人かの教員について排斥決議が採択された。さらに一〇月三一日の試験のとき、四年生全員がある科目で白紙答案を提出し、教育の充実を求める決議文を出して新聞に報じられるまでに至った。その後、生徒と教職員の対立感情は自然におさまっていったが、戦後の混乱がまだ終わっていないことを思わせる事件だった。

スポーツでは水泳部やラグビー部が戦後いち早く復活して対外試合で好成績を収め、他の運動部もこれに続いたが、戦後の混乱と言えば、対外試合の応援にまつわるこんな事件もあった。昭和二二年九月二一日に盛岡で開かれた県下中学校秋期大会に本校からも卓球と体操のチームが参加したが、日曜日だったこともあり応援に出掛けた生徒が少なかった。これに憤慨した五年生の応援団員二人は、翌日と翌々日、応援不参加の生徒全員を校庭に整列させ、反省を求めて鉄拳制裁を加えたのだった。

戦前や戦中なら、ごくありふれたこととして見逃されたこの一件が新聞に報じられ、物議をかもした。当然、そのアナクロニズムが非難されたが、「頽廃した世の中に活気を吹き込むものだ」と応援団員の行動を是認する向きもあった。ともあれ、愛校心や応援団のありかたに、反省材料をもたらした事件だったことは確かである。



いち早く復活の水泳部（昭和27年）